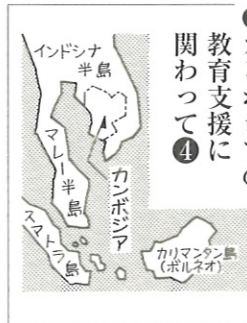


国境なき教師団

●カンボジアの教育支援に関わって④



写真や図版が少なく 黒白印刷の教科書 外国の教科書を参考 としたカリキュラム

金森 正臣 ●愛知教育大学名誉教授
CIESFカンボジアオフィス副代表



●中学2年生の理科の教科書
食物連鎖の説明
引かれている線が適当ではない
<撮影>CIESF松倉

カンボジアの教科書は、一種類しかありません。従って、国定教科書と言えます。写真や図版も少なく、黒白印刷であり、よくありません。教科書は、カリキュラムにもとづいて作られていますが、このカリキュラムに問題があります。数年前に、小学校のカリキュラムが改定されたことがあり、四年生の理科教科書の検討会に参加したことがあります。理科の先生が集められ、地学分野の星座を扱っていました。「四年生までに六個の星座を覚えさせましょう」ということになり、「ニワトリのアタマ座」、「ワニ座」……などクメール名（カンボジア語の名前）の星座が挙げられました。しかし、検討会に集

まった先生はどれも星座を見たことがなく、天空の何処にあるかを知っている人は、一人もいませんでした。また、地方のワークショップに出かけたときに、高等師範学校の理科の教官たちと、星の観察をしました。星座の分かる人はだれもいませんでした。

この例は理科の地学分野の一例にすぎませんが、分からない人たちが集まって、外国の教科書を参考に自国のカリキュラムを作ります。ですから、カリキュラムを作る基本概念もなく、学習の系統性や順序性もまったく理解されていません。このことは、算数分野でも同じです。算数のカリキュラムを作る時に、「やさしいものから教

える」、「教えたものを使って次を理解する」といった考え方がないままに、学習する項目が次から次へと並べられ、カンボジアの子どもたちの実態からかけ離れた教科書が作られてゆく場面に出合ったことがあります。

教科書が作られると、それに沿って教師用の指導書が作られます。しかし、有効な指導例が載っていることは、少ないようです。作る人が内容やカリキュラムを十分に理解できずに執筆しているからです。

カンボジアでは、教科書以外の参考書はほとんどありません。外国の本は入ってきていますが、多くの先生は外国の参考書は読めません。しかし、日本の児童・生徒用のカラー印刷の資料集は、非常に有効で、先生も生徒も言葉が分からないまま食い入るように見えています。そのうちに次第に学習したことと結び付き、理解が少しずつできるようになります。日本で毎年たくさん資料集が、使われないまま捨てられることは、途上国から見たらもったいない話です。

カンボジアの学校の授業時間数は、日本に比べると二割程度少ないようです。教室数が少ないために、基本的に午前と午後生徒が入れ替わります。午前は七時から

十一時まで、午後は二時から六時ころまでです。従って、一日の授業は、四時間の授業です。さらに先生が、アルバイト（先生の給料は安く、アルバイトなどをしなければ、食べていけません）や家庭の用事などで休むこともあり、一〜二割くらいは自習の時間になっているようです。中には、ほとんど休まない先生も、いますが……。

また、カンボジアは祝日が多く、年間二六日間あります。その上、三〜四連休の日が四回もあり、この週は全部が休みになってしまうので、年間三五〜七日間休んでいることになります。

カンボジアでは、ひとたび先生になると、その後はほとんど学習の機会はありません。学習用の参考書もありませんし、図書室にもほとんど本がありません。例えば、小学校の先生の中には、算数の引き算で、繰り下がりの方法を説明できない先生がたくさんいます。このような先生のレベルアップを図るために、教育省も講習会を開いています。同じレベルの先生が講師になっているので、とても難しい状況にあるようです。CIESFでは、退職した日本の先生方の協力を得て、教員養成校における教育の質の向上に努めているところで、